

学苑・文化創造学科紀要 第八五三号 一三〇三二(二〇二一・一一)

更級日記「木ぞ三つ立てる」再考

一

更級日記の上洛の記に下総国「いかだ」での記憶として、雨中の丘の上に木が三本立っていた、と書かれている。一種謎めいた風景であり、三という数字の意味するところをも含めて、さまざまな見解が提出されるところである。十三歳の少女の思い出として、かけがえのない大切な風景なのであるが、やや独り善がりな説明不足の表現と評される文章である。木が三本立つ、という一見平凡な風景の背後には、どのような意味が込められているのであろうか。

日本人がどのようなものに神聖性を感じ、いかなる景観のなかに神の存在を見てきたのかということについて、野本寛一氏は「家の構造が住まう人の思い出の形成とかかわり、地形が人間の精神形成に影響を与える」というフランスの哲学者バシュラールのことばを紹介しながら、「神々の風景」とは、必ずしも古社や名山や大自然のみを指すとはかぎらず、ムラのなかの名もない古池・古木・山かげなどが少年少女を戦慄せしめるとすれば、それもまた「神々の風景」である。」と述べている。^(注一) 更級日記の作者、菅原孝標女にとっては、丘の上に立つ三本の木は、神聖なるものを暗示す

元吉 進

る風景と思われる。このことについて、作者が懂れて已まなかった源氏物語のヒロイン浮舟との関連をも視野に入れながら、再検討してみたい。

二

更級日記上洛の旅に記された風景は次のようであった。

同じ月の十五日、雨かきくらしふるに、境を出でて、下総の国のいかだといふ所にとまりぬ。庵なども浮きぬばかりに雨ふりなどすれば、おそろしくてもねられず。野中に、丘だちたる所に、ただ木ぞ三つ立てる。その日は雨にぬれたる物どもほし、国にたちおくれたる人々待つとて、そこに日を暮らした。^(注二)

寛仁四年(一〇二〇)九月、上総介の任果てた父孝標に伴われて上洛の途にある、十三歳の作者の目に映った東国の風景であり、体験であった。「下総の国のいかだといふ所」とある「いかだ」は和名抄に見える千葉郡池田の転訛あるいは誤写かとされ、「庵なども浮きぬばかり」との連想で、地名と、川に浮かべる筏とを掛けた言語遊戯的表現が指摘されるところである。「木ぞ三つ立てる」という表現については、一見明快な文章である

ものの、その意味するところはさまざまな解釈がなされる。多田一臣氏はこの部分の描写について、「具体的にどのようなイメージに支えられた風景であったのかは、この記述からは明瞭にうかがうことはできない。しかし、この丘の上に立つ三本の木の印象が、後年まで作者の心の中に屹立する鮮明な映像として、この(Ⅱ)の部分(日記九月十五日の条―筆者注)全体の記憶の鍵となっている」とし、少女時代の東国体験の記憶に関わるキーワードとして三本の木は意味を持っているとする。^(注三)一体に、更級日記の表現には川のなかの四本の柱、三人の遊女、三筋の葵、三カ所の川等々、数量的なこだわりが散見され、とりわけ三という数に対しては異常なまでに執着している。小谷野純一氏は三の意味について、竹取物語で竹から発見されたかぐや姫が「三寸ばかりなる人」であったり「三月ばかり」で成人になるなどの例から「古く、聖数の一つとして特別視されていた」とし、「恐怖感を覚えつつ夜の時を過ごした」作者は、「新たな朝を迎えての解放」という気持ちになったのであり、「少女は、三本の木という縁取りによって脱出し得たのだ」とする。^(注四)この部分の表現については、筆者もかつて検討したことがあるが、ここではそれは立ち入らない。^(注五)

日記の当該部分は「ただ木ぞ三つ立てる」とある。この「木ぞ三つ」について、強意の係助詞「ぞ」を諸注「木が三本だけ」の意として「三つ」に対する強調ととるのが一般である。例えば、新編日本古典文学全集本(小学館、一九九四)では「三本だけ木が」、講談社学術文庫本(講談社、一九七七)では「木が三本だけ」、角川ソフィア文庫本(角川学芸出版、二〇〇三)は同様に「木が三本だけ」とする。日記中の足柄越えの場面には「水はその山に三所ぞ流れたる」とあり、足柄山中に水(川)が三カ所流れていたと記すが、この「ぞ」は直前の「三所」を強調しているのであるから、

川が三カ所だけ、という意になる。「木ぞ三つ」に関しても強調する対象は木そのものであって、木だけが三本立っていた、の意ではないだろうか。つまり、三という数字以上に、木そのものが作者の心情と関わっているのである。そこで、以下、木に対する作者の心象と、三という数字の持つ意味とについて、検討してみたい。

まず、「木」について考えてみることにする。以前に言及したことであるが、更級日記で樹木についてふれた描写は前述の場面を含め、全部で三十八場面に及ぶ。^(注六)これには、松、桜などの樹木名を記したもの、黒木の橋などの木材としての樹木、花紅葉などの定型的な表現も含んでいる。それらを樹木の種類によって分類すると次のようになる。

桜(桜の花も含む) ……十四場面

紅葉(もみぢ葉も含む) ……八場面

松(松原、松風も含む) ……五場面

梅(紅梅、梅の花も含む) ……三場面

杉 ……三場面

花橘 ……一場面

柿 ……一場面

樹木名なし(黒木、みやま木、庭の木、柱など) ……十五場面

桜が十四場面、紅葉が八場面と多いものの、それらには「花紅葉」の如き月並みな表現が中心で、具体的な描写は少ない。これに対して樹木名なしでは「黒木」、「みやま木」、「木」、「柱」と樹木名を記さないものが十五場面と多く、それらの用語の総数は二十一回を数え、特に上京後の記の部分には分量が多く、記述も具体的な描写が多く見受けられる。三条の宮の西なる自邸が「ひろびろとあれたる所の、過ぎ来つる山々にも劣らず、大き

におそろしげなるみやま木どものやうにて、都のうちとも見えぬ所のさまなり、「足柄山といひし山の麓に、暗がりわたりたりし木のやうに、茂れる所」、「ひろびろともの深き、み山のやう」などと記している。しかもそれらは「四方の山辺よりもけにしみじくおもしろく」とか、「いづこにも劣らじものをわが宿」、「四方の山辺も何ならぬ」などと親近感を持って樹木が描かれている。これとは対照的に、その家が火災になった後に住んだ家が手狭で、庭に「木などもなきに、いと心うき」と不満を漏らすのである。上洛の記の足柄山では、鬱蒼と木が茂りあったさまを「おそろしげに暗がりわたれり」、「えもいはず茂りわたりて、いとおそろしげなり」、「おそろしげなる山中」、「山の中のおそろしげなる」と形容動詞「おそろしげなり」を連発する。その足柄山を連想させる京の自邸の描写には、上京直後にただ一例「おそろしげなる」と記しこそするものの、以降はこの表現は影を潜めるのである。京の自邸は「住みなれしふるさと」であり、鬱蒼と茂る庭の木々は決して疎ましい物ではなかった。以後も、東山への転居に際しても「こぐらき梢ども（中略）なにとなく茂りわたれる空のけしき、曇らはしくをかし」、「こぐらう茂れりし木の葉ども残りなく散りみだれていみじくあはれげ」などと書き、木暗く茂った木立や森に、むしろ親近感や懐かしさを感じている。浅見和彦氏は上京の記「まのてう」の段に描かれた川中の四本の大きな柱について、「出雲や諏訪をはじめとして、古代に巨木、巨柱への信仰があったことはすでに知られている。更級日記作者が瞩目した四本の柱がいかなうなものであったかは分からぬが、巨木柱への畏敬心を育みそだててきた古代人の心性と彼女の心に観感したものは、その始点において近いものがあつた」と指摘している。^(注七) 雅びな紫草はなく「蘆荻のみ高く生ひ」茂ったと記す武蔵野の原風景にも通じる古代人的

な心性が孝標女にも感じ取られるのだが、木への親近感はそのような心の現われと思われる。

三

上総国で芽生えた作者の物語への憧憬は、上京後「源氏の五十余巻」を手に入れたことで一応叶えられる。源氏物語耽読の結果作者が心に描いたものは、「光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ」という願望であつた。それは「紫の上・明石の上の栄耀を願わず、家住みの身に期し得る夕顔・浮舟を自己の将来に思い描くようになつたまいものであつたと評される。^(注八) こうした願望は以後も折にふれて記され、とりわけ浮舟に関しては四カ所に及び、そこでは「浮舟の女君のやうに、山里にかくしすゑられて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心ぼそげにて、めでたからむ御文などを、時々待ち見などこそせめ」とか、「宇治殿を入りて見るにも、浮舟の女君の、かかる所にやありけむなど、まづ思ひ出でる」などと強い親近感が表出されている。浮舟はあこがれの人生だったのだが、これには現実の孝標女の生い立ちが関わっていると考えられている。東国に下った体験を持ち、常陸介の継娘である浮舟と、常陸に程近い上総国で少女時代を過ごし、また常陸介の娘である作者には共通するものがある。勿論、浮舟は八の宮の姫君であり、その出自は受領の娘に過ぎない作者とは大きな隔たりがある。作者の実人生は、浮舟の幸福に比べるべくもなかったという意識がこの日記執筆時にあり、それが日記冒頭の「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人」と記して、「浮舟よりも更に草深い奥地から、おぼろに三人称化した自己」を登場させ、「いかばかりかはあやしかりけむを」と、自嘲めいた言葉を添えて筆を起こ

すという記述になったとされるわけである。^(注九)

ここで、作者が浮舟に親近感を抱いたことを、別の側面から検討してみたい。それは、浮舟と樹木との関係ということである。つまり、浮舟には樹木の精とでもいべき性格が指摘できるのである。源氏物語の最後のヒロイン浮舟の存在が初めて語られるのは宿木巻だが、舞台の中心人物になるのは東屋巻からである。

筑波山を分け見まほしき御心はありながら、端山の繁りまであながちに思ひ入らむも、いと人聞き軽々しうかたはらいたかるべきほどなれば、思し憚りて、御消息をだにえ伝へさせたまはず。^(注十)

この部分は「筑波山端山繁山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」(重之集)によった引歌表現とされる。受領の妻となった中将の君は、娘浮舟を伴って陸奥国、常陸国と東国を渡り歩いた。常陸国の歌枕筑波山は夫の「任国を表象する歌語であって、中将の君・浮舟母娘の流離の辛苦を表現するもの」であり、「端山の繁り」は「浮舟の不運な身分や境遇を象徴する歌語」なのであった。^(注十二)浮舟は筑波山に繋る木々によってイメージされているのである。

また、手習巻冒頭には、宇治院で横川の僧都によって浮舟が助けられる場面がある。ひどく荒れた宇治院は、僧たちにとっても「森かと思ゆる木の下を、うとましげのわたり」と感じられる。その庭の暗がりには、「髪は長く艶々として、大きな木の根のいと荒々しきに寄りゐて、いみじう泣く」のが浮舟であった。それを目にして、僧たちは「狐木霊やうの物の、あざむきて取りもて来たるにこそはべらめ」と言っている。木霊は樹木に宿る精霊である。その木霊に浮舟は見立てられていることになる。この

「森かと思ゆる木」については、『源氏物語評釈』(第十二巻、玉上琢彌、角川書店、一九六八)は「社祠のある木立であろう」とし、新編日本古典文学全集本(小学館、一九九八)頭注は「神木であろう。」「森(杜)」には神聖な樹叢の意があり、現代でも、祭祀に用いる神木を「もりき」、神社を「もり」と呼ぶ地方がある」としている。単なる森の木であれば、「森かと思ゆる」という表現は不適切であるから、やはりここは神聖な場所であり、信仰の対象となっていた大木であろう。さらにまた、夢浮橋巻において、横川の僧都は薫に浮舟発見の事情を「天狗木霊などやうのものの、あざむき率てたてまつりたりけるにや」と語っている。手習巻の「狐木霊」が「天狗木霊」と変わっているのであるが、「天狗は山の神でもあり、樹木が天狗である、または樹木が天狗の出現する場所であると考えられていた」^(注十二)とされる。そのような精霊出現の聖なる空間としての大木の根元に、木に抱かれるようにして、浮舟は伏しているのである。木と浮舟に密接な関係性が窺えるところである。

その他、浮舟と樹木との関連は随所に描かれる。浮舟巻で勾宮に抱かれながら舟中から見た「橘の小島」は、「されたる常磐木の影しげれり」とあった。また、小野の庵に移って意識を回復した浮舟は、失踪前後のことを「大きな木のありし下より人の出で来て、率て行く心地なむせし」と回想している。さらに、手習の歌には初瀬川の「二もとの杉」を詠んだり、自らを「あまのうき木」に喩えたりしてもいる。浮き木は筏のことであった。また、小野の庵は「造りざまゆゑある所の、木立おもしろく、前栽などもをかしく、ゆゑを尽くしたり」という風情で、浮舟は「引板ひき鳴らす音もをかしく、見し東国路のことなども思ひ出でられて」と感じている。そこは、母とともに巡った東国を思い出させ、それはまた懐かしい母の懐

のような場所だったのである。そして、そこには木立が茂っているのだった。このように、浮舟には樹木との間に親密な関係性が指摘できるのである。浮舟は樹木の精霊とでもいふべき特性がそなわっていたと言えるだろう。

更級日記作者にみられる樹木に対する親近感には、憧れて已まなかった浮舟の存在が大きく影を落していると思われる。前常陸介の継娘である浮舟は筑波山の聳える常陸国育ち、東国育ちであった。筑波山の端山の茂りが浮舟を象徴するものであれば、その浮舟を憧れ慕った孝標女にとっては、木立の茂りあった風景は自らの生い育った東国の原風景であり、象徴的に浮舟を想起させるものであったと言える。孝標女にとって、浮舟は樹木の精霊であり、自己の心性と通ずる存在として共感を持って読まれたのである。

源氏物語との関連で、一点付言しておきたい。日記中、源氏物語の登場人物について名前が挙げられているのは、光源氏、夕顔、宇治の大将（薫）、浮舟、宇治八の宮の娘達であった。このうち、作者が憧れの対象としたのは夕顔と浮舟であった。源氏物語の書名を「紫のゆかり」、「紫の物語」と記してはいるものの、女主人公であり、こうした書名の由来となった紫の上については一言もふれる所はない。もっとも、浮舟以外の人物についても言及はなされず、いわば名前が挙げられたに過ぎない。源氏物語の登場人物ゆかりの場所について、地名が挙げられているのは、浮舟との関連で宇治がある。そこは作者自らの長谷詣での途上、物語の舞台として思いを馳せている。それ以外では、物語の舞台を意識して描いている例はない。ただ、上総からの上京の旅で名が挙げられた「近江あふみの国おきながといふ人の家」の所在地である息長については、夕顔おきながに「息長川と契りたまふこ

と」とあって、これは万葉歌「には鳥の息長川は絶えぬとも君に語らむ」と尽きめやも」を引き歌とした表現になっている。憧憬の対象の一人であった夕顔の存在が意識されているとも考えられよう。物語の女主人公紫の上の存在は、孝標女にとっては興味の対象ではなかったようだが、ただ、「紫の物語」の書名が挙げられているように無視できる存在ではなからう。紫の上は「北山きたのやまになむ、なにがし寺でうといふ所」で光源氏に見えられ物語世界に登場したのであった。この「なにがし寺」の比定については、鞍馬寺説、あるいは岩倉大雲寺説、仁和寺説等、諸説があって決着をみないのであるが、河海抄以来、鞍馬寺が有力な候補地とされる。河海抄は源氏物語本文の「つづら折をり」に注目し、「此寺鞍馬寺歟昔は四十九院あり仏法盛地也云々（中略）鞍馬のつゝらをりをり清少納言枕草子にみえたり」として、つづら折りの参道の存在をもって鞍馬寺の象徴としたのであった。

更級日記によれば、作者は四十歳の頃、春と十月と二度鞍馬寺に籠っている。

春ごろ鞍馬くらまにこもりたり。山ぎは霞かすみわたり、のどやかなるに、山の方より、わづかにところなど掘りもて来るものをかし。出づる道は花もみな散りはてにければなにもなきを、十月ばかりに詣づるに、道のほど山のけしき、このころは、いみじうぞまさるものなりける。

として、以下、晩秋の鞍馬の、時雨に濡れる紅葉の風情が描写されている。注目されるのは、ここには源氏物語若紫巻の存在が全く欠如していることである。この前年には作者は長谷詣でをし、その途次、宇治の渡りで宇治十帖の世界を懐かしく思い起こし、浮舟に思いを馳せてもいた。しかし、この鞍馬詣では作者はそこが源氏物語の重要なゆかりの地であることを

無視したかの如くである。紫の上が作者の憧憬の対象でなかったとしても、あまりに冷淡に過ぎる扱いのように思われる。ちなみに、日記のこの部分は、源氏物語横笛巻の次の描写との関連が考えられている。

御寺のかたはら近き林にぬき出でたる筈、そのわたりの山に掘れる野老などの、山里につけてはあはれなれば奉れたまふとて、御文こまやかなる端に、「春の野山、霞もたどどしけれど、心ざし深く掘り出でさせてはべる、しるしばかりになむ。

朱雀院が筈と野老を女三の宮に贈った場面だが、「寺」、「野老」、「掘る」、「山里」、「春の野山」、「霞」などの設定が共通しており、「あはれ」と「をかし」の意識も表出されていることから、更級作者が若紫巻の「こうした件りに思いを馳せていたと憶測しても不自然ではない」という指摘がある。^(注十三)にもかかわらず日記の鞍馬寺籠りにつづら折りも紫の上にも全く言及がないのである。これは、更級作者のなかでは、北山のなにがし寺は鞍馬寺などという認識がなかったことを意味しているのではないだろうか。源氏物語が成立した直後における読者の享受の一つの在り方を表しているように考えられるのである。

四

次に、更級日記の「木ぞ三つ」のうち、「三つ」という数字について検討してみたい。ここでは、前述の、不安や危機的状況からの救済という役割を担った数字、ということに加えて、三に関する別の側面を考えてみたい。日記上洛の記に、

雪ふりあれまどふに、ものの興もなくて、不破の関、あつみの山など越えて、近江の国おきながといふ人の家に宿りて、四五日あり。

とあった。日記中、人名が明記されるのはこの息長氏以外では三回のみである。それらは竹芝伝承のなかで語られた「武蔵といふ姓」、「あすだ川」の渡りで「在五中将」在原業平の和歌についてふれた段、大嘗会の御禊の喧噪をおして初瀬詣でに出立した際に顔を出す「良頼の兵衛督」である。これ以外に衛門の命婦、越前守のよめ、侍従の大納言の御むすめなど、官職名や女房名で書かれた人物は多くいるが、作者が身近に接して、しかも実名で書かれた人物は良頼（藤原隆家男）と息長氏のみである。藤原良頼についてはここではふれないが、息長氏の名を明記したことについては、なにがしかの背景がありそうである。

息長氏に関する歴史資料は少ない。「古代史上に占める息長氏の役割は、従来の諸見解においても、歴史の表面に直接登場しない、きわめて内在的なものとされており、その考察に多くの困難性がまつわりついている」と^(注十四)される、謎多き氏族である。古事記中巻の開化天皇条には、御子の日子坐王の妻の一人として息長水依比売の名が挙がる。その四世の孫息長宿祢王の娘が仲哀天皇の皇后、息長帯比売命（神功皇后）であると書かれる。応神天皇はこの息長帯比売命を母とする。景行記には、倭建命の子孫に息長真若中比売の名があり、応神記には天皇がその比売を娶ったことが記される。天武紀には、天武天皇十三年（六八四）冬十月に息長公が真人の姓を賜ったことを記している。延喜式の諸陵寮には「息長慕舒明天皇之祖母名曰広姫。在近江国坂田郡。」とあって、息長氏は近江国坂田郡を根拠地にしていたことが知られる。また、権記の長徳元年（九九五）十月二十四日に

「近江国筑摩御厨長息長光保株満替文」とあって、琵琶湖岸筑摩の御厨の長に息長氏が当たっていたことが分かる。前掲の万葉歌「には鳥の息長川」に歌われた息長川はこの息長氏の根拠地を流れて琵琶湖に注いでいた。

「には鳥」は水鳥カイツブリの古名で、潜水が巧みで長時間水中に潜ることで、つまり息が長いことから、「いき」の母音交替形「おき」を含む息長川に掛かる枕詞であった。カイツブリはまた「しながどり」とも呼ばれるが、その「し」は「あらし」（嵐）の「し」同様、風や息の意であった。

そのことと関連付けて息長氏の姓と氏族の歴史が説明されている。近江国坂田郡に丹生の地名があり、息長丹生を称する同族があるが、丹生は古代において重要な鉱物である水銀の化合物丹、すなわち辰砂（硫化水銀）を産する場所であった。このことから、息長氏は鉱山や製錬に関わるとする説がある。金属製錬には火を用い、火をおこし火力を高めるには息や風が必要とされるからである。一方、これとは別に、「には鳥」が水に潜る水鳥であることから、息長氏は海人系の氏族であろうともされる。上田正昭氏は「近江坂田の息長氏の伝承には、海人的性格がまつわっていた。近江坂田は北陸と大和とを結ぶ要所に位置した。『古事記』の応神天皇の条にはこの蟹や いくつかの蟹 百伝ふ 角鹿の蟹の歌がある。この歌は敦賀地方の海人集団が御贄を大和へ貢上する寿歌が本来の姿であった」とするが、応神天皇の母は息長氏を出自とする息長帯比売命であった。このように、息長氏は近江国坂田郡を拠点として息長川から琵琶湖水系を支配していた海人系の氏族と考えられる。

古事記中巻、仲哀天皇の条は息長帯比売命（神功皇后）の新羅親征について述べている。亡き天皇の御子を宿し遠征に向かう皇后は、腹の子が男子であるという託宣を得るが、そのお告げを下した神は

是は、天照大神の御心ぞ。亦、底箇男・中箇男・上箇男の三柱の大神ぞ。へ此の時に、其の三柱の大神の御名は、頭れき。〔注十七〕

と答えている。これは「託宣が、天照大御神の神意によるものであるとともに、託宣の神が墨江三神でもある」（注十七の頭注）ことを言っているのである。この三神は、上巻で伊耶那岐命の禊ぎによって生まれたことが書かれており、それ以来の登場になる。その禊ぎの場面では三神について、

水底に滌ぎし時に、成れる神の名は、底津綿津見神。次に、底箇之男命。中に滌ぎし時に、成れる神の名は、中津綿津見神。次に、中箇之男命。水の上に滌ぎし時に、成れる神の名は、上津綿津見神。次に、上箇之男命。此の三柱の綿津見神は、阿曇連等が祖神と以ちいつく神ぞ。故、阿曇連等は、其の綿津見神の子、宇都志日金析命の子孫ぞ。其の底箇之男命・中箇之男命・上箇之男命の三柱の神は、墨江の三前の大神ぞ。

と述べられている。墨江三神（住吉三神）は皇后を守護し、遠征を成功に導いたことで、海上守護の神として崇められることになってゆく。住吉神は海神であり、海人系の人々の信仰を母胎としているが、ここではまた阿曇（安曇）一族も海人の系列として名が挙げられている。

なお、釈日本紀第十一巻に引かれた播磨国風土記逸文には、この息長帯比売命の新羅親征について、あるエピソードを伝えている。新羅出征に際し、息長帯比売命は神々に祈願するが、「新羅の国を、丹の浪を以ちて平伏け賜はむ」という尔保都比売命（丹生都比売命）の託宣があり、ついで「赤土を出だし賜ひき。その土を天の逆棹に塗りたまひ、神舟の鱧と舳に建てたまふ。また御舟の裳と御軍の着衣を染めたまひぬ。」と書かれている。

丹生都比売命は赤土、すなわち魔除けの力を持つ丹を与え、それでもって赤い浪を起こし新羅を平定しようとしたのである。軍船や、鉾、鎧が赤く塗られ、息長帯比売命は真っ赤な姿で船出したのである。息長氏の本拠地である近江国坂田郡に丹生の地名があり、それが息長氏が鉾山や製錬に関わる氏族という説の根拠になっていることを先に述べた。「神功伝説の形成に、息長氏が関与したことについては、神功皇后がオキナガラシヒメと称することから、従来より注意されていた」、「記紀にみえる神功伝説と系譜は、天武朝以降、息長氏の関与によって成立した」とされるように、^(注十九)息長氏は神功皇后伝説成立と深い関わりを持っていたのである。歴史の表舞台にこそあまり登場しないが、息長氏は着実に地歩を固め、朝廷のなかで確かな勢力を保っていたようである。

息長氏や阿曇一族同様、宗像氏も海神を祀る海人系の氏族であった。古事記上巻で、天の真名井における天照大御神と須佐之男命の「うけひ」(誓約)によって神々が誕生したことが述べられる。須佐之男命の剣から天照大御神が生み出したのが宗像の三女神であった。

まづ生める神、多紀理毘売命は、胸形の奥津宮に坐す。次に、市寸島比売命は、胸形の中津宮に坐す。次に、田寸津比売命は、胸形の辺津宮に坐す。此の三柱の神は、胸形君等が以ちいつく三前の大神ぞ。

と書かれる。この宗像三神は海上守護の神として胸形氏(宗像氏)の祀る神であった。宗像神社の祭神として玄界灘の海岸や島に祀られているのは周知の通りである。

以上の海人系の神々の関係について北見俊夫氏は、『古事記』が説く前述の阿曇連の斎く綿津見三神と、津守連が斎く筒之男三神とは同じ時に生

じ、系譜上、兄弟関係にある。両者の種族系統は水野裕の説によれば、インド・チャイニーズ系に属する海人族と考えられ、(中略)玄界灘に達し、博多湾の志賀島や北九州沿岸部を本拠地としていたもの」、「住吉三神は津守系海人族で、綿津見三神を祀る志賀海神社を本社とした阿曇系海人族の分派とみられる。それに対して独立の神統譜をもつ宗像系海人族は、水野祐によれば海女を主体とするインドネシア系漁撈民で、(中略)特異な潜水漁法を身につけていた」とまとめている。^(注二十)

さて、ここで海人系の人々が斎き祀る神々、すなわち住吉三神、宗像三神、綿津見三神がいずれも三神であることが注目される。八百万と言われる日本の神々は、熊野三山や出羽三山のような例はあるものの、必ずしも三柱一セットで出現したり祀られたりするわけではない。益田勝実氏は、これら海神三神を祀る氏族について、「ただ一柱の主神や、イモ・セの兄妹神を祀るものが多い陸上の諸氏族に対して、三位一体(三坐一社)の神を祀る点で、かれらは顕著な共通性をもつ」としている。^(注二十一)海人系の人々が斎き祀る神には、このように三という数が重要な意味を持っているのである。

五

更級日記に立ち戻れば、上洛の記で作者は「近江の国おきながといふ人の家」で四、五日を過ごしたことを記していた。日記によれば、近江国に入った一行は息長氏の家から「みつさかの山」を過ぎ、犬上、神崎、野洲、栗太を「なにとなく過ぎ」、琵琶湖の竹生島を遥かに見やうて、近江路を駆け上るように通過している。その後は、近江国の栗津に留まって入京の支度をしている。近江路はあわたたしい旅だったわけだが、にもかかわら

ず、息長氏の許に四、五日も日数を費やしたのである。その理由は不明だし、そこでの見聞には一切ふれられていない。これより以前の日記の行程は墨俣の渡り、野上、「不破ふはの関」、「あつみの山」、そして息長氏の家と続いているが、この道順は地理的事実を反映していない。墨俣の渡りは尾張・美濃の国境、不破の関は美濃・近江国境に位置し、その中間に野上がある。「あつみの山」は和名抄の「美濃国」に「厚見郡」、「厚見阿都美」とあることから、厚見郡にある山と考えられる。厚見郷は現在の岐阜市内南部、木曾川と長良川に挟まれた辺りであるから、既に通過したことになる墨俣の渡りの東北に位置する。従って実際の順路は墨俣、厚見山、野上、不破の関、息長氏の家となるべきところである。日記中、こうした地理的矛盾はしばしば見受けられるところだが、そうした矛盾の多くは単なる作者の記憶の誤りというのではなく、作品の表現と関わらせての意図的改変、つまり虚構と考えられている。では、作者がこの位置に厚見山を持ってきた意図は何であろうか。この改変では厚見山の次が息長氏の家、ということになる。つまり、作者はこの両者を近接させることで、密接な関係性を持たせたかったのではないだろうか。

先述の海人族、阿曇族は西から東に移動する間に各地に定着し、内陸に移り住んだ一族もあると考えられている。そうした土地には安曇、厚海、阿積、渥美などの地名が残され、信州の安曇野、愛知県の渥美などはそれ由来するとされる。谷川健一氏は、そうした地名として近江国「琵琶湖の西側には安曇川の地名を残し」、「岐阜県にも「和名抄」の美濃国厚見郡厚見郷がある」と指摘している。^(注二十二)「あつみ」は息長と同様、海人族の人々に関わる土地だったことになる。

海人族の斎き祀る海神は、三柱でセットになっていることが基本であっ

た。息長氏もまた海人族の流れを汲む一族と考えられている。その家に四、五日も長居をした作者は、その間に、息長氏の者からその栄えある祖先神について、神功皇后の説話やら何やらを聞かされた、あるいは父孝標が話されるのを傍で聞いていたことがあったのではないか。ちょうど上総国にあつて「姉、継母ままははなどやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏ひかるげんじのあやうなど、ところどころ語るを聞」いたように。息長氏の語りでは、住吉や綿津見や宗像の三神のことも話題に上ったであろう。あるいは同じ海人族のゆかりの地「あつみ」の名が、旅の話題に挙げられたかもしれない。上京の途次、「まの長者」伝説、竹芝伝承、富士川伝説に耳を傾け、伊勢物語東下りの故地に興味を示してきた作者にとって、そうした海人の伝承を耳にしたとすれば、強く心に刻み込まれたことと思われる。後年になって我が一生の日記を思い立ち、少女時代のそうした思い出を辿る時、近江国の息長氏の家で聞いた伝承は強烈な印象で思い起こされたであろう。

上総国「いかだ」での恐ろしい一夜を回想する時、雨中の丘が想起起こされ、その上に木が三本立っているというイメージが脳裏に浮かんだのである。その三本の木という風景自体は虚構の可能性も考えられよう。しかし、三という数が神々に関わり、聖なるものだという認識は、日記執筆時の作者のなかには確かに存在した。その数字は作者にとって恐怖感からの解放と関わりと考えられた。その三は、海に鎮座する海神の象徴としての聖なる数だったからである。

「木ぞ三つ立てる」には、作者の如上のような心情が込められていると考えたい。

- 一、『神と自然の景観論 信仰環境を読む』（講談社学術文庫、講談社、二〇〇六）
- 二、更級日記の本文は、以下、日本古典文学全集（小学館、一九七二）による。
- 三、『更級日記』上洛の記をめぐって―心の密室ということを中心に―（『論集日記文学 日記文学の方法と展開』、笠間書院、一九九一）
- 四、『更級日記全評釈』（風間書房、一九九六）
- 五、『更級日記上京の記の表現について』（学苑 日本文学紀要）平成十三年一月号、昭和女子大学 近代文化研究所）
- 六、『更級日記の薬師仏をめぐって―木への視線―について』（学苑 日本文学紀要）平成十八年一月号、昭和女子大学 近代文化研究所）
- 七、『王朝の女たちと東国―東国文学史稿（三）―』（成蹊国文）第三十五号、成蹊大学、平成十四年三月）
- 八、犬養廉『更級日記』（日本古典文学全集、小学館、一九七二）
- 九、注八に同じ。
- 十、源氏物語の本文は、以下、日本古典文学全集（小学館、一九七〇～一九七六）による。
- 十一、小町谷照彦「橘の小島」（講座 源氏物語の世界）第九集、有斐閣、一九八四）
- 十二、上原作和編『人物で読む『源氏物語』 第二十巻―浮舟』（勉誠出版、二〇〇六）
- 十三、注四に同じ。
- 十四、大橋信弥『日本古代国家の成立と息長氏』（吉川弘文館、一九八四）
- 十五、注十四の書において、大橋氏は「息長丹生氏と上丹郷の存在に注目して、息長氏が新羅系の鉾物採掘・製錬技術を持っていた証拠である」とする村山光一氏の説を紹介している。
- 十六、『日本の歴史 第2巻 大王の世紀』（小学館、一九七三）
- 十七、古事記の引用は新編日本古典文学全集（小学館、一九九七）による。
- 十八、播磨国風土記の引用は新編日本古典文学全集『風土記』（小学館、一九九七）による。
- 十九、注十四に同じ。
- 二十、「海の道・川の道―内陸水路と海路の様態―」（日本民俗文化大系6『漂泊と定着』第四章、小学館、一九八四）
- 二十一、「玄海に祀る『三位一体神』」（探訪神々のふる里二『黒潮と神々の峰』、小学館、一九八二）
- 二十二、『日本の地名』（岩波新書、岩波書店、一九九七）

（もとよし すずむ 文化創造学科）